

2025年7月30日

**世界の人びとのための J I C A 基金活用事業
終了時活動報告書（2024 年度採択案件）**

1. 業務の概要	
(1) 案件名	日本の虫除け文化が世界を救う AMIDO プロジェクト
(2) 実施団体名	NPO 法人 S.O.L. (ソル) 札幌支局
(3) 実施期間	2024 年 12 月 9 日～2025 年 6 月 30 日
(4) 実施国	スリランカ民主社会主義共和国
(5) 活動地域	クルネーガラ県クルネーガラ市（ポルガハウエラ地区）
(6) 活動概要 - 活動の背景： スリランカでは年間 3 万人以上がデング熱に罹患し、2017 年には 18 万人超が感染するなど、深刻な社会課題となっている。蚊帳や殺虫剤を用いた対策は普及しているが、デング熱を媒介するネッタイシマカは日中に活動するため、夜間対策中心のマラリア型の手法では効果が限定的である。日中に窓を開放するスリランカの生活様式の中で、物理的防蚊対策として有効な網戸の設置は、未だ「贅沢品」として浸透しておらず、普及の障壁となっている。 S.O.L.が開発した安価で自作可能な AMIDO は、こうした生活スタイルに適応した持続可能な対策となり得る。また、スリランカのガールズホーム退所者の多くが社会的に不安定な立場に置かれている現状がある中、彼女たちに虫除け教育のインストラクターとしての訓練と就業機会を提供することで、女性の自立支援と健康教育の普及が両立できる。 さらに、デング熱の予防には正しい知識の共有と実践が不可欠であり、S.O.L.は日本の虫除け文化や製品の活用を伝えるワークショップを通して、生活者主体の感染予防文化の醸成を目指す。現地では網戸の技術的普及と共に、予防意識の啓発、女性のエンパワメントが喫緊の課題である。 - 活動の目標： クルネーガラの人々がデング熱の虫除けを実践できるようになる。 - アウトプット 1 デング熱予防教室の基本的仕組みが地域に構築される - アウトプット 2 虫除けの啓発活動が展開される	

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容

アウトプット1-1：テキストを作成する

防虫剤などを開発している企業の蚊の研究者、国立感染症研究所、スリランカのデング熱研究者への聞き取り調査や National Dengue Control Unit、東京外国語大学スリランカ研究室の刊行物、ネット情報などを元に「デング熱予防教室テキスト」を作成した。内容はデング熱について、防虫方法の他、予防教室運営の手引きなどをまとめ、日本語で作成、シンハラ語、英語に翻訳した。

アウトプット1-2：教室実施のための資材を調達する

教室実施のための資材を調達した（帯鉄：延生金属、磁石テープ：稲田建設、防虫網：ホームセンター、現地素材店、テープ：現地スーパー・現地素材店等）。

アウトプット1-3：予防教室のカリキュラムを策定する

予防教室のカリキュラムを策定すべく勉強会を実施した。詳細は以下の通り。

1. デング熱についての知識/オンライン3回
2. 虫除けについての知識/オンライン1回
3. AMIDO の作り方/オンライン1回、現地実習5回
4. 教室運営について/オンライン1回
5. 伝え方ワーク/オンライン3回
6. まとめの回/オンライン1回（他オリエンテーション1回、交流会1回）

アウトプット1-4：ガールズホーム退所予定者からインストラクターを養成する

ガールズホーム施設長が6人を選抜した（ケラニア大学の学生3名も参加）。

S.O.L. より3名、通訳1名が指導にあたった。勉強会ではクルネーガラ市長、副市長、スリランカ現地スタッフ、小樽スリランカ名誉領事館職員も参加し、現地では予防教室のスク립ト製作、リハーサルを重ねた。

アウトプット1-5：デング熱予防教室をパイロット実施する

デング熱予防教室を以下の通り計3回パイロット実施した。

1. クルネーガラ市役所の会議室（PHI=Public Health Inspector、広報対象）
2. 市役所ホール（建築関係者対象）
3. Wayamba technical college（工業系学生対象）

アウトプット1-6：パイロット実施の評価と改善を行う

1回目の予防教室の後、クルネーガラ市長、現地スタッフ、通訳とミーティングを行い、アンケート結果を元に改善点を話し合った。2回目の予防教室に向けて即座にプレゼン資料（PowerPoint、スク립ト）の変更、リハーサルによる見直しを行った。

アウトプット1-7：認定制度と継続的な実施を市役所に提案する

現地での話し合いにより、市役所ではなく Wayamba technical college でインストラクターコースを新設し、資格を取れるようにした方が、今後活動がクルネーガラ市から広がりを見せた時に他の自治体でも資格を使いやすいという意見があり、Wayamba technical college の校長へインストラクターコースについて提案した。校長は前向きであり、今後カリキュラムなどについて策定していく。

アウトプット2-1：啓発内容も含めたチラシやリーフレットを作成する

クルネーガラ市の一般市民の為の資料（リーフレット）を作る予定だったが、現地の意向（一般市民に向けての啓発活動は時間がかかり過ぎるため、専門家からのプレゼンを希望）を踏まえ、作成しない方針で進めた。代わりに現地の意向により、PHI や建築関係者など専門家向けの PowerPoint 資料を

作り、プレゼン形式にしての啓発活動に変更した。一般市民向けは将来的に作成を検討する。

アウトプット 2-2：市役所と協力して予防教室の広報を行う

デング熱予防教室に広報担当者が参加し、S.O.L. への取材を行い、広報担当者が一般市民に向けて予防教室の内容を発信した。

アウトプット 2-3：学校を訪問し啓発活動の可能性を調査する

クルネーガラ市としては限られた学校へ訪問するより、学校の先生を一か所に集めてそこで啓発活動や意見交換をした方が良い、との提案があった。

アウトプット 2-4：インストラクターを活用した啓発活動の計画を作成して市役所に提案する

現地渡航中に提案を行った。市役所は前向きに検討してくれるとのこと、市長はインストラクターへの報酬についても可能性を言及した。

その他

1. 現地の現状、慣習を把握するためのアンケート実施：現地で予防教室後と 6 月に Google フォームで計 2 回行った。予防教室後の紙のアンケートは 95%の参加者に回答してもらえたが、事後の Google フォームでの回答率はわずか 8%と低く、同国でのアンケートの取り方について改善の余地があった。
2. デモンストレーション用 AMIDO 設置：AMIDO 材料の到着が遅れたものの、ガールズホームのベッドルームに AMIDO を設置する事が出来た。病院への設置は時間の都合で叶わず、資材はガールズホームのご好意でホーム内のホールに無料で保管して頂けることになった。次回の渡航時に病院へ設置したい。

(2) 実施成果：

アウトプット 1

- ・ デング熱予防教室テキストを完成させ、インストラクター養成対象者に配布、勉強会で活用することができた。
- ・ 必要な材料を日本とスリランカで調達・輸送する事が出来た。
- ・ 予防教室のカリキュラムを完成し、勉強会や現地での実習、リハーサルで活用した。
- ・ ガールズホーム退所予定者からインストラクターを養成し、インストラクター役の少女たち 6 名は専門家の前でもインストラクターらしい振る舞いでデング熱予防教室を行う事ができた。
- ・ デング熱予防教室を計 3 回、パイロット実施できた。
- ・ 第 1 回目のパイロット実施の評価と改善を速やかに行うことで、より専門的な内容に第 2 回目以降の内容が充実し、評判も良かった。
- ・ 認定制度と継続的な実施を市役所に提案し、Wayamba technical college で資格を取れるコースの創設を校長に提案できた。

アウトプット 2

- ・ 今後、啓発内容も含めたチラシやリーフレットを作成することを提案できた。
- ・ 市役所の広報担当者と繋いでもらう事で本格的な広報を行えることがわかった。
- ・ スプートニクガールズホームはスプートニクインターナショナル（ガールズホーム、日本文化センター、日本語学校を有し、それぞれ違う場所に存在する）の施設だが、同じ系列の日本文

化センター内、アジアホール」に初等～中等教育の学校の先生や日本語学校の先生を集めての啓発活動の提案ができた。

- ・ インストラクターを活用した啓発活動の計画を前向きに検討してもらえた。

その他

- ・ 初めて設置した AMIDO で蚊が室内に入ってこられない様子を皆で見る事が出来、喜びを分かち合った。
- ・ 予防教室の参加者は新しい情報を知る事が出来、虫除けに関して意識が変わった。デング熱予防教室聴講の PHI、建築関係者、専門学校の学生と先生合わせて 74 名、リハーサル時聴講者 20 名、インストラクターと現地スタッフ 8 名を入れると 103 名の本プロジェクト参加者が虫除けについて考え AMIDO を知る事ができた。「家全体を蚊帳にするという発想は無かった！」と驚きの声と共に異文化ながら受け入れられたことが喜ばしかった。S.O.L. は蚊を避けるものとして AMIDO を紹介したが、現地の人々は食事中的ハエを避ける事にも期待していた。
- ・ アンケート回答者 45 名のうち全員（100%）が網戸の事を知らず、全員（100%）が良い物だと期待している事がわかった。半数以上が AMIDO 設置を希望していたが、材料の調達が難しそうだ、と懸念の声もあった。自由回答欄にも積極的に記入して頂いており、薬剤を使わない、健康的、宗教上にもとても良い方法だ、などと奨励する声が多くあった。又、「良い事なのでこれからも頑張って」という声も見られ、励みになった。

（３）得られた教訓など：

日本から材料の輸出は思っていたよりハードルが高かった。出国の際に梱包のやり直し（輸送時に梱包の一部が破損したらしい）が生じたり、スリランカ行きの便が減便していたことで想定以上の時間を要した。航空便はコストがかかる上、関税率が 200%と材料を低価格で購入できたところ残念だったが、JICA との協力であることを示すレターにより関税率を 80%まで抑える事が出来た。予期せぬことを予想する事は難しいが、日程的なことは全てを疑って計画する事は大事だと思った。

渡航前はポルガハウエラ地区住民の方々へ向けた予防教室で、学校や地域センターなどでの開催を計画していたが、現地到着直後のミーティングで、クルネーガラ市長や関係者から「スリランカは社会主義なので上から言わないと誰もいう事を聞かない国。」「ここはスリランカを良くわかっている我々の方針でやって欲しい」と言われ対象者が一般住民から専門家へと変わってしまった。もちろん数か月前からプランは共有し、小学校や地域センターの候補地まで上がっていたが、このような直前予定変更もありがちな国だったな、と改めて肌身に感じた。

現地での参加者は丁寧にアンケートに記入してくれ、回収率も 95%を越えていたので帰国後のアンケートについて安心していただけだったが、そうはいかなかった。帰国後 6 月、Google フォームで送ったアンケートの回収率はわずか 8%だった。アンケートは対面で回収しないと難しく、シンプルかつ簡単に答えられるようにする必要を感じた。また、回答率を上げるには事後報酬などの仕組み作り、インセンティブの必要性も感じた。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

今回、約束していた病院の新生児室への AMIDO 設置が終わっていないので実施したい。クルネーガラ市は新築する家には AMIDO 設置の条例を作ると宣言し、この事業を続けて行きたいという熱意を感じるが、市自らの力だけで継続する事は難しそうだ。まず、スリランカ国内に室内に適應する良質な材料調達が国内で出来るようにしないと条例施行も難しいと思う。

事業自体は好評であったが、遠隔操作は難しく、現地で指揮をする人の必要性を感じた。また、お金を生み出す仕組みや投入資金なしではできない事が多いと感じた。S.O.L. と提携している現地 NGO SULO もたとえ電話一本でも何か S.O.L. の要望で動くのであれば、経費以外にそれなりの報酬を要求されているので、何でもお願いできる状態ではない。よって、お金を生み出す仕組みや投入資金なしではできない事が多いと感じた。また、事業がなるべく途切れないように、民間の助成金にも引き続き挑戦しつつ、草の根事業への採択も目指したい。

３．その他(エピソード・感想・写真など)

（１）活動中のエピソード・感想など

今や世界中の情報が取れる時代なのに AMIDO の事が「知らなかった！！」とこんなにも驚かれた事にびっくりした。私たちは蚊を避けるために、と紹介したが、現地では食事時のハエに困っているらしく、テレビニュースになるデング熱の怖さより、日々の困りごとの方がインパクトが強いのだな、と感じた。

建築関係者対象のデング熱予防教室では、会が終わった後も 30 分以上、多くの質問や建築の事を教えてくれる設計士さんがいたりとかかなりの反響だった。

オンライン勉強会と現地で数日 AMIDO 作りやりハーサルをただけでも、地位の高い大人たちの前でインストラクター役のガールズホームの女の子達が堂々と説明している様子を見て S.O.L. のワークショップの効果を感じることができた。オンラインでの勉強会では「伝え方」にも力を入れ、インクルーシブコミュニケーション・スペシャリストによるワークショップを３回取り入れ、一般講義の時にもオプションで組み込んだ。ここで自分の話すときのイメージ作りや表情、動作、間の取り方、モチベーションの上げ方などを学び、予防教室で上手く表現できたと感じている。

（２）活動の写真

下部の通り。

（３）JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

温めてきたことの第一歩が踏み出せて嬉しかった。JICA 基金に採択してくださり、ありがとうございました。

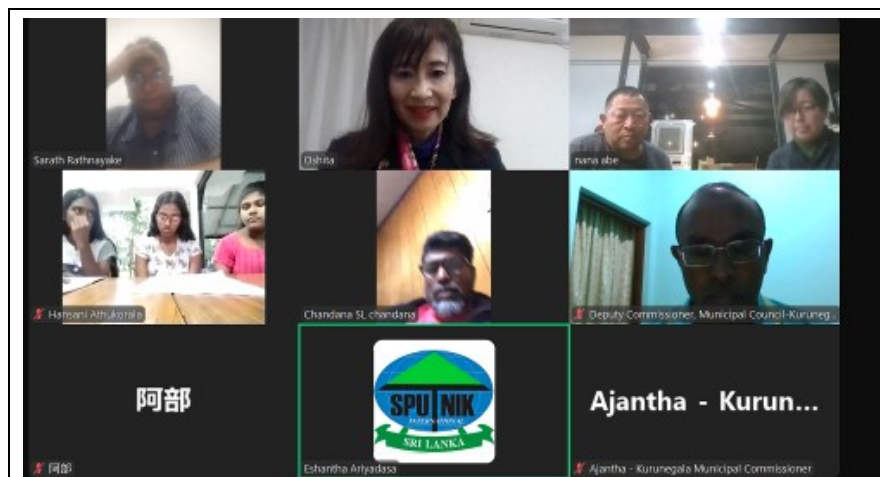
この事業を行う為に NGO 登録に挑戦し、政府の認証を得る、という経験を経て、今までの蚊取り線香寄贈など、サークル活動のような国際貢献ではなく、胸を張って言える国際貢献が出来たと思う。

また、今までは日本人との交流的な事業（ビジネスマッチングやスタディツアーなど）が多かったが、今回初めて現地の人中心に働いてもらう、という事を行い、仲良くするだけではなく、報酬を伴う作業という事で緊張感も増したが現地の働く人のリアルな温度感を体感できた。

不安はあったものの、時間を守らないとか、言い訳をして逃げてしまう、といった「良くあるスリラ

ンカ人のあまり良くない事」が感じられず、それどころか、皆さん非常に協力的でスムーズに事が進んだと感じている。AMIDO も受け入れられない時、「どのようにアピールして行けば良いか」など、準備していたが、使わずに済み、上手く行きすぎて戸惑うほどだった。

これは今回、カウンターパートのクルネーガラ市が積極的であった事と、社会主義国ならではのトップダウンが良いように作用し、又、人選の運が良かった、と感じている。



オンライン勉強会



AMIDO 作成実習



AMIDO 第一号



第1回デング熱予防教室



スプリクト作成